

日本の美しいことば

く万葉言葉塾く

【第1回】ありがとう

奈良大学文学部国文学科教授

上野 誠

今月から「日本の美しいことばく万葉言葉塾く」を連載することになりました。第1回に私が選んだ言葉は「ありがとう」です。

医者 残念ですが、上野教授のお命は、この二日
が山場でしょう。

妻 そうですか。私も、覚悟はしていましたが、
やはり、主人のことが不憫ふびんでなりません。
よくしていただきました。これまで、いろ
いろ励ましていただいて。

医者 いや、それが私どもの務めでありますから。

妻 オヨヨ（泣く声）
上野 あっあ……
妻 オヨヨ
上野 あっあ……

これは、この文章を書いている私こと、上野誠先生が、自分の最期さいごのことを思い浮かべて書いた文章です。さて、ここでいきなり問題です。上野先生が、「あっあ……」と言ったとありますが、上野先生は、何を言いたかったのか、考えてみてください。

さあ、わかりますか。答えは「ありがとう」です。なぜ、そう言おうと思ったかというところ、これまで苦勞をかけてごめんなさい。ほんとうに私の人生をよく支えてくれました。感謝しますという気持ちを、妻に伝えたいからです。



上野 誠 (うえの・まこと)

現在 奈良大学文学部教授 (国文学科)。
国際日本文化研究センター客員教授。博士 (文学)。

1960年、福岡県生まれ。国学院大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。著書『古代日本の文芸空間—万葉挽歌と葬送儀礼』(雄山閣出版)、『万葉びとの生活空間—歌・庭園・くらし—』(塙書房)、『芸能伝承の民俗誌的研究—カタとココロを伝えるくふう—』(世界思想社)、『大和三山の古代』(2008年、講談社)、『万葉びとの奈良』(2010年、新潮社)、『よしのよく見よ』(2011年、角川学芸出版)、『万葉挽歌のこころ—夢と死の古代学—』(2012年、角川学芸出版)など多数。また、近年執筆したオペラ『遣唐使』の脚本も好評を博している。

万葉文化論を標榜し、ユニークな視点とソフトな語り口で人気上昇中の若手万葉研究者。MBSラジオ「上野誠の万葉歌ごよみ」やNHKラジオ「ないとえっせい」などにより、『万葉集』を学ぶことの楽しさを、多くの人びとに伝えている。

研究のテーマは、万葉挽歌の史的研究と、万葉文化論。第12回日本民俗学会研究奨励賞受賞(1992年、日本民俗学会)。第15回上代文学会賞受賞(1998年、上代文学会)。第7回角川財団学芸賞受賞(2009年、角川財団)。歴史学や考古学、民俗学を取り入れた万葉研究で、学界に新風を送っている。

私は、ここで「ありがとう」という言葉を使いましたが、もしこれを漢語でいうなら「感謝」ということになります。意味は同じですよ。だから、「感謝します」と言ってもいいはず。しかし、死の床で、私は、「感謝します」とは、言わないと思います。やはり、「ありがとう」です。では、「感謝します」というのと「ありがとう」と言うのでは、何が違うでしょうか。「感謝します」と言うと、どこかよそよそしい。夫婦の間、しかも死ぬ時には、心の底から自分が大切にしてきた思いを伝えたいものです。そんな時に、「感謝します」と言っただけは、冷たい感じがするのです。ここからは、例え話となりますが、言葉には、その言葉がもっている温度のようなものがあります。温かい温度が必要な時と、冷たい温度が必要な時があります。私が、自分が死ぬ時に「感謝の

意を、ここに表明します」と言わないのは、温かみのある言葉を使いたくないからです。一方、冷たい言葉が必要ないかと言えば、そんなことはありません。例えば、人命救助をした人に贈る感謝状では、「貴殿の勇気を讃え、ここに感謝の意を表明します」と私も書くと思います。皆の前で、公おおやけの席で、その行動を誉める時には、かしこまった言い方をしなくてはなりません。こんな時は、「感謝の意を表明します」と言うのです。つまり、言葉というものを使う時には、時と場を選ぶ必要があるのです。たぶん、私が死の間際に「あぁあ……」と言っただとしても、妻はその言葉が、「ありがとう」だとわかると思います。言葉というものは、発する側も、相手によくわかるように使うのがあたりまえですが、聞く側も、相手が何を話そうとしているのか、よく考える必

要があります。伝える人と聞き取る人が互いに協力しあってこそ、言葉というものは伝わるのです。では、声に出さなければ思いは伝わらないかといえ、声にはありません。声に出せない時は、頭を下げることで、感謝の気持ちを伝えることができます。

◇

「ありがとう」という言葉は、「ありがとう」という古い言葉が変化したものです。「ありがとう」とは、「あるのが難しい」ということです。あなたにしてくれたことは、なかなかめったにないことだ、あるのが難しいことだということです。これが転じて、感謝の気持ちを表すようになりました。私は、子どものころ、「ありがとう」という言葉がなかなか言えませんでした。だから、この連載は、「ありがとう」から始めました。ありがとう。